バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第 154 号〔2017 年 12 月〕

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8 章 22 節

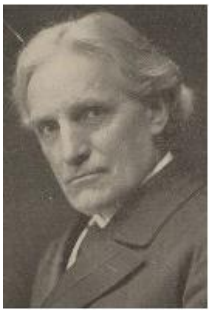
『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋‥＋

主の聖名を賛美します。 バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第 154 号をお送りします。 12 月は恒例の持ち寄りパーティー。祝会の前に、「聖書と福音」のラジオ放送から高原剛一郎師によるメッセージに耳を傾け、賛美と祈りを捧げました。

「あなたの心にクリスマス」

高原 剛一郎 師



聖書学者として権威的な存在にある H. C. モリソンという方がいらっしゃいました。彼はまだ幼かった時にご両親を亡くされ、施設で育てられたのですが、少年時代に問題を起こし、警察に逮捕されて法廷に立つことになりました。この事件はモリソン氏の生涯を決定づける出来事となり、彼にとって将来わすれることができない経験だったそうです。

裁判官は事務官に尋ねます。「この子の代理人はいるのかね。」「いいえ、いません。」
すると裁判官はそこに居合わせた弁護士に突然話を振ったのです。「あなたをこの子の弁護人とする。」
すると弁護士は少しも驚くことなく二つ返事で引き受け、そしてモリソン少年に尋ねたのです。
「あなたは、犯罪を犯したと思いますか。」「はい、罪を犯しました。」
「ではその罪を正直に法廷で告白して、裁判所の情けにすがるのがよいと思いませんか。」「はい、そうします。」
すると弁護人は大きな声で言いました。「裁判長、司法の目的が保たれ、社会秩序が守られるのであれば、裁判所が情状酌量するのが慣例かと思います。私はここで震えているかわいそうな孤児に裁判長の慈悲を求めます。少年が罪を認め、赦しを求めているからです。」

更に弁護人は裁判官に向かって意外な呼びかけを付け加えたのです。「お父さん、私はこの子の保証人になり、教育を施します。この子には見込みがるように思うのです。この子は将来、きっと社会に役立つ誠実な市民になるに違いないと、私は思えて仕方ないのです。」 なんとこの弁護人は、裁判官の息子だったのです。すると裁判官は、「よろしい。」と宣告し、自分の息子である弁護人をモリソン少年の代理人としたのです。

モリソン少年は何一つ良いことも、償いもしていません。ただ恵みにすべてをかけてその場に立っていた。本人の行いとは無関係に、あれよあれよという間に許され、チャンスを与えられ、未来に向けての投資が流れ込んできたのです。
私たちはやがて死をむかえます。死んだのちに、私たちはひとり一人神さまの前に立つのです。全てを見通しておられる神様の前で、無罪ですと主張できる人は誰もいません。全ての人が罪人なのです。 しかし、あなたをお造りになった神は、ご自分の息子であるキリストにあなたの弁護を任命なさっているのです。 この弁護人が弁護できない罪は何一つありません。

なぜ主イエスに救えない罪人がないのでしょう。主イエスは最悪な罪人のためにもご自分のいのちを捨てられ、罪人の償いをなしてくださったからです。もしあなたが生きている今のうちに、あなたのために死んでくださった、いや 3 日目によみがえられたイエス・キリストを救い主として受け入れるならば、あなたは最強の弁護士を得たことになるのです。一度は少年犯罪を犯したモリソン少年が、人生の中で起こった不思議な神の介入を感謝して受け入れ、やがて聖書学のオーソリティとして押しも押されもせぬ大学者となり、その事によって人類に大きな貢献を果たしていったように、キリストを信じた人には、新しい人生が与えられるのです。

このイエスキリストを信じて、新しい人生に入ること、それこそが本物のクリスマスです。 なぜならクリスマスとは、キリストをお祝いする事であるからです。心にキリストを迎え入れることこそが、本当のクリスマスを経験するということなのです。